

## 遊びのなかの学びを再考する

— 学びを育む教育課程改訂とその検証 —

錦井利臣\*・石川由里子\*・大塚桂子\*  
宮村まり\*・植田美樹\*・鈴木麻子\*  
藤田公子\*・瀬口明美\*

Reexamination of Children Learning at Play

— Revision and Reexamination of Curriculum Fostering Learning —

Toshiomi NISHIKI and Yuriko ISHIKAWA and Keiko OOTSUKA and Mari MIYAMURA  
and Miki UEDA and Mako SUZUKI and Kimiko FUJITA Akemi SEGUCHI

### Abstract

Ever since 2002, we have reappraised young children learning while they are at play with a belief that they learn wherever they are. With the use of observations on their everyday life and having repeated conferences on the subject, we have clarified their learning factors and processes, revalidating how well young children learn at play. We have also reexamined the present curriculum in terms of fostering children learning.

In our study we have placed an emphasis on the nursing of five-year olds, intending to locate collaborative play in the school curriculum. We have thus inquired into how our curriculum can be successfully related to primary school education.

We are planning to further our studies so that we can help young children to learn better from each other at play, and also to take a responsive and ingenious approach to learning. We will keep on cultivating children's willingness and positive attitudes towards learning.

### 1 はじめに

グローバル化, 国際化, 情報化社会といわれるこの現代, 幼児に求められている力の一つに自ら課題を見つけ, 解決する力「生きる力」がある。本園では自主選択活動を中心に保育を展開している。幼児は自分たちでやってみたいと思う遊びに取り組み, 納得のいくまで試行錯誤している。そのような活動のなかで幼児は「生きる力」の土台を築いている。

本園では平成15年度から「遊びのなかの学びを再考する」をテーマに研究を重ねてきた。幼稚園教育要領や本園の年間指導計画のもと, 遊びのな

かで幼児が何を学んでいるのかを探ってきた。

また, 文部科学省中央教育審議会(中間まとめ)2004年10月29日「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」第1章『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性』のなかに保育者の幼児教育を実践する上で必要となる力量, 専門職としての資質を問われている。実際問題として日頃の保育を考えてみたとき, 環境の構成はこれでもいいのか, 幼児の実態に合っているのかなどと保育を振り返ることの重要性を感じた。生きる力を育む保育を展望して接続期の充実を図るため, 幼児が遊びのなかから何を学び, 成長するのか, また, そのための保育者自身の保育のあり方について研究を進めてきた。

\* 熊本大学教育学部附属幼稚園

## 2 研究主題について

### (1) 主題のとらえ

幼稚園教育要領解説では『幼児期の生活のほとんどは遊びによって占められている。この遊びの本質は対象に夢中になり時の経つのも忘れてかわり、そのものを楽しむことにある。遊ぶこと自体が目的である。幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれる。』と記述されている。

そこで、本園では「遊び」について次のようにとらえる。

- ・それを行うことそのものが自己目的である。
- ・幼児が心のなかの知的世界に何か変化を起こし（心的変容）その変容から安定を得て新しい価値の発見をすること。

本園の保育は自主選択活動を基本としている。このなかで子ども達は信頼感・自立心・自律心・有能感を培いながら成長していく。子ども達自身が自発的・能動的に環境にかかわりながら自分の世界を広げ充実感をもつ。そして更に、就学前には子ども達は、大勢の友達とかかわりながら同じ目的に向かって取り組めるようになり、協力的で協調的な心情や意欲、態度、などを培う。

本園で幼児にとって遊びのなかで学ぶことは

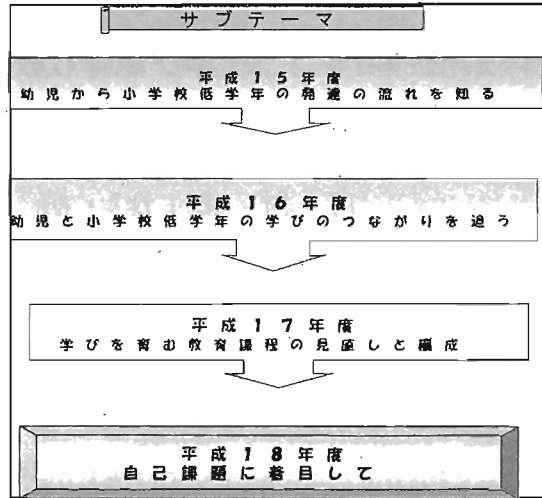
子ども自身が主体的に生きていくための大切な学びであり、これから成長していく上での礎となる。幼児は様々な遊びのなかで、試行錯誤をくり返し、保育者の援助を受けながらある発見をして一定の納得をしていく過程。

と考える。このような意味で本園の園生活のなかでは「遊びのなかに学びがある」と考える。

### (2) これまでの研究から

これまでの研究サブテーマは下図の通りである。

H15・16年度は「幼小の連携」を見据えて学びのつながりについて研究してきた。H17年度からそれまでの研究の成果や課題点を明らかにし子ども達の遊びの姿を追いながら遊びのなかの学びについてカンファレンスを重ねてきた。H17年度3月に現行の「教育課程」の試案を作成し、本年度は実践のなかで検証した。そのなかで『幼児一人一人の「遊びのなかの学び」にはその子の自分の課題（目的、目標）があり、それを解決するため



の発見や納得をするために試行錯誤を繰り返している。』ことに気づき、私達は『課題を解決する過程のなかにも多くの学びがある』と考える。』に至った。幼児一人一人の（自己）課題を保育者が知ることによって解決のためのよりよい援助や支援を行うことができると考えるのである。

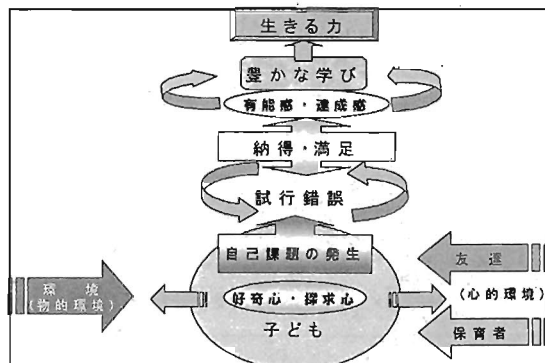
H18年度は幼児一人一人の「自己課題」に着目して豊かな学びのある保育のありかたを追求していこうと考えた。

### (3) 「自己課題」とは

本年度は「自己課題」に着目し、実践を重ねていくことにした。

「自己課題」とは子ども達が遊びのなかで「これをして、これをしよう、やってみよう。」と対象に能動的に働きかけながら好奇心や探求心をもって納得を得ようとする。また、友達とのかかわりのなかで試行錯誤しながら取り組み、お互いに学びを得ること。

ととらえた。言い換えれば、『意欲』『欲求』『自己目的』ともとらえられる。それに加えて、今の自分の遊びをよりよい方向へ向かわせようとするプラスの感情をもって取り組もうとすること



ではないかと思う。乗り越えなければならない事柄もあるが、幼児が興味のあることを実現しようと自発的に取り組んでいるなかにそのことがその子の発達にとって意味があるものとなる。自発的に取り組む活動そのものを本園では「自己課題」ととらえている。

尚、今回は「自己課題」に関する実践、検証にかかわることについては紙面の都合上掲載していない。

### 3 研究の方法

#### (1) 実践記録をカンファレンスする

幼児一人一人の遊びが「学び」へとつながっていくような環境の構成、援助、そして子ども達の変容、学びの姿を記録する。

#### (2) 公開保育研究会で研究テーマを提示し、協議する

- ・幼児教育研究会（11月）
- ・公開保育研究会（1月）

#### (3) 保育研究会を実施する

- ・年齢別保育研究会（お互いの保育を視点に沿って観察した結果を通して保育のあり方を追求する）
- ・VTR研修（視点に沿って撮影したVTRを視聴しながら保育者の援助及び幼児の遊びの内容や言動を通して保育の課題を追求する）

#### (4) 講師招聘による研修を重ねる

- ・研究協力者制度の実施…園より依頼した研究協力者（熊本大学教育学部教授、助教授、講師の方々、県内外の保育研究者、小学校教諭）を園内研究会に講師として招聘する。
- ・年に6回の土曜保育実践セミナーの開催（県内外から講師を招き保育関係者と保育について協議し合う）

#### (5) 小学校との連携を進める

- ・小学校の授業を参観し、教師間で情報を交換しながらなめらかな接続について考え合う。（17年度から継続観察している子どもを対象にして、入学後も授業の様子を観察する）
- ・「学び」という点から、小学校低学年の「学び」と本園が追求してきた「学び」の実際を照らし合わせた「学び」のつながり確かめる。

#### (6) 教育課程を見直し検証する

- ・18年3月に「学びを育む」という視点から教育課程を見直した改訂試案を18年度に実施し検証する。

## 4 研究の実際

#### (1) 教育課程の見直しと再編成するにあたって留意した点～見直しの視点～

幼稚園でも社会環境や幼児を取り巻く人々の価値観などに変化が生じていることを日々感じるのである。「基本的な生活習慣の定着は?」「友達とのかかわりの基本がゆらいでいる?」「自分の言葉で語れている?人の話を聞ける?」などこれまで以上に細やかな指導と継続的なかかわりが求められる。教育課程については修正・加筆してきたが17年度はこの3点に「学びを育む」視点を加え、4視点を基に、見直しをすることとした。

#### (2) 「幼児の学び」について

##### ～個の学びと集団のなかでの学び～

幼児の学びを育む上で大切にしてきたことの一つに幼児一人一人の学び「個の学び」と「集団のなかでの学び」のつながりがある。幼児は園生活のなかで安定した気持ちで過ごし、興味をもって環境にかかわりながら遊びを進めていく。幼児が「やってみたいな。」と思ったことを試行錯誤を繰り返しながら納得のいくまで取り組んでいく過程や姿を保育者は一人一人の育ちを考えながら学びを支えていきたいと考える。

このように個の学びを豊かにしながら、友達とかかわる楽しさを味わえるようになると集団のなかで様々な経験を重ね、かかわりをもとうとするようになる。

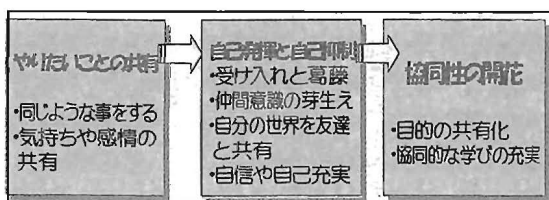
例えば、5歳児において、みんなと一緒に活動することは集団のなかでの楽しさを経験し、様々なことを教え合い、学び合う機会となり時として一体感を味わえることがある。（集団のなかでの学び）しかし、全ての子ども達はその楽しさを味わっているとは限らない。自分にとって不都合な仲間関係であったり、自分なりの思いや考えに見通しがもてないまま、集団のなかでいたりする子どももいる。また、仲間との関係のなかで自分の欲求を抑えて我慢しなければならないこともあり、「くやしい・悲しい」といった負の経験も生じてくる。私達はそのような状況のなかで子ども達に無理に活動をさせるというのではなく、子ども達の思いを受けとめたり、ほぐしたりしながら子ども同士で解決の方向を考えていけるような援助が必

要だと考える。仲間との葛藤をそれぞれの個へ返し、その個の育ちを集団のなかでの学びへとフィードバックしながら「個の学び」と「集団のなかでの学び」をつないでいくかわりをするのが大切だと考えている。このような関係づくりの工夫こそが保育者の力量を問われる部分ではないかと思う。

### (3) 「協同的な学び」の基礎～協同性の育ち～

保育カンファレンスを通して分かってきたことは幼児の学びは「友達とのかかわり」におうことが多いということであった。

幼児同士が人間関係を深めていく基盤として「物」とのかかわりがある。物とかかわることで他者とかかわり、自己を育てていく。そして、物とかかわるなかで他者と考えや思いを共有できるようになっていく。これが協調的な心情や意欲、態度（協同性）のはじまりととらえている。協同性の育ちは次のような発達をたどると考える。



3歳児は物や環境にいろいろとかかわりながら他児のする行為にも関心をもって自分でも同じことをやってみたいと思う（感情の共有）が始まるようになる。

4歳児になるとしだいに相手の視点に立って考えられるようになる。同じ場を共有し一緒にいながらも自分自身の世界も大切に。他者を意識し始めるので感情と行動をコントロールすることに葛藤が始まる。

5歳児になると他児の活動のペースや感情に同調しながらかかわりをつくっていくことができるようになる。5歳児後半（接続期）になると、これまで一緒に活動するなかで深まった人間関係を基盤に、互いに学び合い同じ目的に向けて協力していくことが可能になってくる。

このようにして協同性を培うことを通して「生きる力」の基礎をつくり、「協同的な学び」を深めていくものと考え。子ども達がこれまで育んできた信頼感や自律性、自発性を発揮し、他者とかかわり合ったり、自己抑制したりして活動することや学ぶことの喜びをより質の高いものへと発展させるのではないかと考える。

### (4) 保育実践カンファレンス

私達は研究を進める時、「子どもの実態から」という基本的な考えを貫いてきた。「教育課程の再編成」にあたっては、子どもの学びの姿をとらえ、学びを再考することで、より確かな育ちの道筋をつかむことができるであろうと考えてきた。

これまで、保育のなかでとらえた子どもの姿を記録したり、保育終了後に、日常的に保育者間で情報交換したりしてきた。

17年度からは、保育研究の一環として、「保育実践カンファレンス」を取り入れた。一人の保育者がとらえた子どもの姿とその読み取りを、他の保育者と話し合うことで、幼児理解を深めたり、環境の構成の在り方や保育者の援助について省察したりして、保育のあり様を深めた。

#### ＜実践記録の例＞

時間	遊びの様子	時評
9:40	（先月の様子から） 例年は朝から「夏はまた来ないの？」と話をしていた。どうして眠しているのかその時は分からなかったのだが、夏はこの日の前日に先王を上手に作って雨降の水道から開けられるようになった。 （園児）「見て、きれいでしょ？」 （保育者）「夏はまた来ないの？」と話をしていた。どうして眠しているのかその時は分からなかったのだが、夏はこの日の前日に先王を上手に作って雨降の水道から開けられるようになった。 （園児）「ぼくのはこの中。」 （保育者）「お二人はこれ。」 （園児）「お二人はこれ。」 （保育者）「お二人はこれ。」 （園児）「お二人はこれ。」	・園児は朝から「夏はまた来ないの？」と話をしていた。どうして眠しているのかその時は分からなかったのだが、夏はこの日の前日に先王を上手に作って雨降の水道から開けられるようになった。 ・園児は朝から「夏はまた来ないの？」と話をしていた。どうして眠しているのかその時は分からなかったのだが、夏はこの日の前日に先王を上手に作って雨降の水道から開けられるようになった。 ・園児は朝から「夏はまた来ないの？」と話をしていた。どうして眠しているのかその時は分からなかったのだが、夏はこの日の前日に先王を上手に作って雨降の水道から開けられるようになった。

18年度は、新たに「自己課題を追求する」という視点から、「自己課題をもってとりくんでいるのではないか？」ととらえられた遊びの場面や生活の場面の子どもの姿と保育者の援助したことを記録した。また、17年度から学びの姿を追い実践記録し観察対象児を中心に記録をとって報告し、発達を追求することができるようにした。

17年度にカンファレンスした実践のなかから、1学期に2～3実践を選び出し、再カンファレンスすることになった。それは、カンファレンスを進めていくなかで、子ども達の遊びの様子のとらえ方や、学びの要素の表現の仕方が変化してきたことが原因である。再カンファレンスすることで、新たな「自己課題」という視点で子どもの学びをとらえ直した。それは、教育課程改訂試案と具体的に照らし合わせ、発達の姿を検証していくという目的もあった。

その再カンファレンスしたものを、再度見直し、まとめ直してできたものが、「学びの要素表」である。

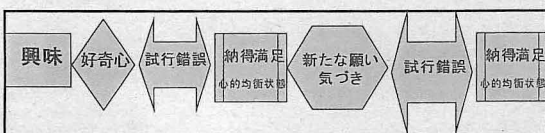
保育実践カンファレンス 学びの要素表 年長組		
*紙面の都合上一部を抜粋している。		
期	V みんなでより楽しい園生活を営む	
	3. 友達と協力したり協調したりして遊ぶ	
月	9月	10月
場	<ul style="list-style-type: none"> <li>Tの誘いから世界の旗を絵の具でかく。</li> <li>目的と環境はTが設定した。</li> <li>遊びに参加するタイミングは、Cが決めて参加する。</li> <li>TがCに個別にかかわって活動している場面。</li> <li>TとC一人の活動にFが関心をもち話題を共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Tからの働きかけで、年長組全員での話し合いをもち、「渡り板をつくる」という共通の目的をもった。</li> <li>Tが誘い、渡り板をつくる活動が始まる。</li> <li>参加状況は、各自で選択できるような状況をもった。</li> <li>TとC一人の活動にFが関心をもち活動に参加する。</li> </ul>
子	<ul style="list-style-type: none"> <li>O目的をもつ。</li> <li>O Fの目的と関連する言動をする。</li> <li>話に出てきたことについて知っていることを話す</li> <li>Fの活動の手助けになるものをFにもってくる</li> <li>Fの目的達成に必要な方法を伝える</li> <li>必要な道具を渡す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>O新しい活動に関心をもち、目的をもつ</li> <li>大勢のFと共有の目的</li> <li>その目的達成に必要な活動をする(活動の見通しと意欲)</li> <li>Oその場の雰囲気に合わせて同調する。</li> <li>O自分の意思を伝達する。</li> <li>O予測する。</li> <li>Tの助言を予想して体で表す</li> <li>予想して疑問をもつ</li> </ul>
ど	<ul style="list-style-type: none"> <li>O Fがしていることに関心をもち、O Fのために状況に沿うような行動をする。</li> <li>手助けになるものを渡す</li> <li>方法を教える</li> <li>O Fから受け入れられないことを知る。</li> <li>O 受け入れたいFの言動に抵抗する。</li> <li>O認められると喜びの表現をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>O Fと受け入れ合いながら一緒に活動する。</li> <li>必要なことを頼む</li> <li>黙って頼みに応じる</li> <li>交代しながら同じ活動をする</li> <li>Fに肯定的な言葉を発する</li> <li>O Tの誘いを受け入れる。</li> <li>O TとCが楽しさを共有したことを感じる。</li> </ul>
も	<ul style="list-style-type: none"> <li>O言葉で知識を提供する。</li> <li>FやTに知っていることを話す</li> <li>O用途にふさわしい道具を使う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>O FやTに言葉で伝える。</li> <li>自分の気付き</li> <li>場に応じた言葉遣いで</li> <li>O Tの意図することを整理して言葉に表す。</li> <li>O Tが日常のなかで遣う言葉を遣う。</li> <li>O技術を習得していく。</li> </ul>
の	<ul style="list-style-type: none"> <li>位置関係を把握している。(順序)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞いたことを、リズムカルな音で表現する。</li> </ul>
姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>Fの参加によって願いが実現に向かってきたようだ。</li> <li>Fを受け入れることが少ない(自分本位) Cもいる。</li> <li>肯定的な言葉が少ない Cもいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動を共に楽しさを共有することで友達との肯定的な関係が生まれているのではないか。</li> <li>活動の充実</li> <li>人間関係の柔軟さ</li> </ul>
	・T・・・保育者 ・C・・・幼児 ・F・・・友達	

5) 学びのサイクル

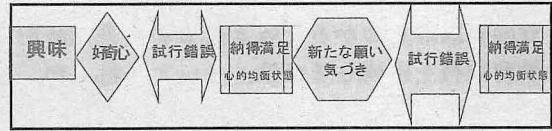
子ども達の遊びはその子ども一人一人の違いがあり様々であるが、その遊びの姿を分かりやすくするために基本的な形に表した。

《学びのサイクル》

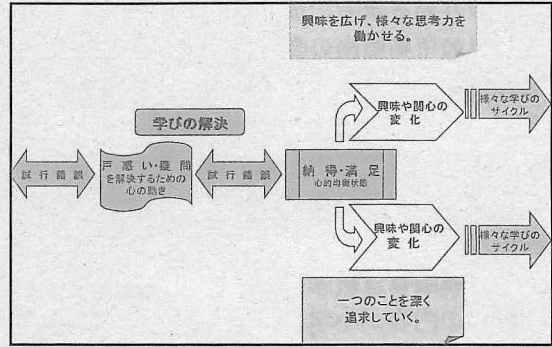
- ① 同じ遊びを繰り返しながら気付きを確認していく姿。



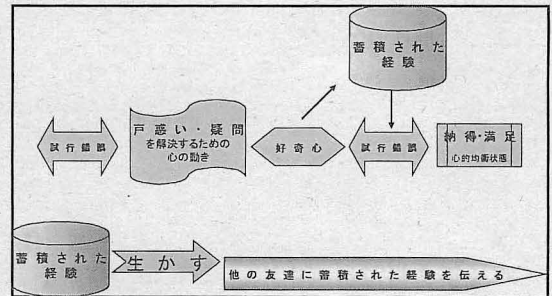
- ② 好奇心をもって試行錯誤を重ねていく姿



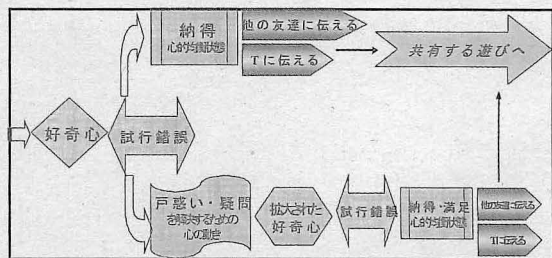
- ③ 試行錯誤を繰り返して遊びを深めていく姿



- ④ 蓄積されている経験を生かし、遊びを豊かにしていく姿



- ⑤ 友達や保育者に気付きや発見を伝えながら学び合う姿。  
友達から周辺の友達へ、そしてクラスの友達へと伝え合う姿



5 保育実践

本年度は教育課程を改訂する上で「学びを育む」という視点を鑑み改訂した。特に5歳児では接続期(3学期・入学前の時期)には小学校教育との学びのつながりを考えた教育課程を編成した。しかし、本園の教育課程は小学校の教科とつなげているのではなく、できるだけ段差の少ない接続するためにどのような保育を展開していくのか、



子ども達にはどのような力をつけていくのかこれまでの実践からわかったことをもとに発達に沿った教育課程を編成している。

(1) 公立小学校教諭による保育実践

「動く車で遊ぼう！」

① 取り組みまでの流れ

1月の下旬県南の公立小学校より「地元の保育園との連携を見据えて本園で幼児の実態や保育のあり方などを学びたい。」という依頼があった。本園でも接続期にあたり、本園の子ども達が小学校の先生の保育をどのようにして取り組んでいくのかその姿を追うことにした。小学校教諭は『新聞紙を使った遊び』を計画した。その内容が小学校の教育と本園の保育の間でかみ合わないところがあり何度か話し合い、実際保育に参加し保育内容を考えていった。その保育のなかで自分達でつくった車を使って遊ぶことを計画し、子ども達と一緒に遊びのなかで空き箱を使って動く車をつくった。

② 期の経験してほしい内容・日時

2・3年保育混合5歳児 教育課程 V-4  
経験してほしい内容 ㉟

「1年生になるという喜びや期待をもち、いろいろなことに積極的に取り組む」

平成18年2月22日(水) 場所：リズム室

時間：9:30~10:30

保育者：I教諭(公立小学校教諭)

観察者：石川由里子・鈴木 麻子

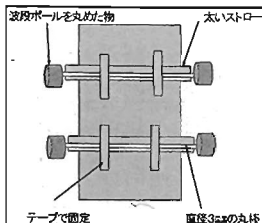
(幼児名は全て仮名とする)

③ 場面

- ・リズム室に大型、中型積み木、小積み木を置く。
- 大型積み木の上には子ども達がつくった車を並べておく。
- ・新聞紙、テープ、布ガムテープ、カラーペンを用意する。
- ・保育者側からのグルーピングではなく、気の合う友達と一緒に活動する。

④ 子ども達の姿

\*動く車は空き箱やカップをつかって、遊び



のなかでつくっていった。子ども達と一緒に車輪が回転する仕組みを考えた。㉠

\*子ども達はI教諭との保育に抵抗なく、集まる時もすぐに気持ちを切り替えて話を聞いていた。㉡

篤史は新聞紙を丸めて切り目を入れ引き出そうとしていたがうまくいかずI教諭を呼び分らないところを尋ねていた。



\*理子が手で支えている長細い積み木の上には車が乗っている。それを倒すと傾斜面を伝って車が転がり、傾斜の下にあるトンネルのなかに車が入っていく仕組みになっている。理子はその仕組みを考え、何度も試行錯誤して取り組んでいた。㉢



\*夏子と志保は初め、仲良く積み木や新聞紙を使って遊んでいた。途中から動く車の駐車場をめぐるお互いの考えがぶつかり合ってしまった。途中、I教諭がお互いの話を聞いていたがここで二人はI教諭に解決を求めていかなかった。「仲良くつくっていたのにけんかばかりに…」と夏子は志保に思いを出しな



がら、自分達でどうにか解決の糸口を探していこうとした。㊦ 20分ほどお互いに思いを出し合い夏子のはさみをもって、新聞紙を切り始めたある瞬間からお互いの気持ちがほぐれていった。再び二人は一緒に遊び始めた。

\*この遊びについて遊びの内容を聞いたり、工夫したところや困ったことを出し合って話し合った。

I教諭のすぐ前にいた雪子は教諭の膝の上に両手を置いていた。この活動を通して、雪子はI教諭に親しみの気持ちを表していた。

真央が、手を挙げた。

真央：「わたしね、光一君の飛行場とつなげてみたかった。」

光一：「ほく、まだつくりたいものがあるもん。それができたらいいけど。道路だけならつなげていいよ。」㊦

子ども達はこの日につくったものを整理して置くことにし、翌日もこの遊びの続きをすることを提案した。翌日、子ども達は自分がつくった町や道路、家などを近くの友達とつなげて遊びの空間を広げていった。㊧

## ㊨ 考察

・この活動のねらいの一つは、担任以外の小学校教諭による保育のなかに、『子ども達が自ら考え、自分達で活動を進めていく』ことであった。教諭の話の聞いたり㊦ 分からないことがあると自分で尋ねたり、教諭に親しみの気持ちを行動で表したりするなど、この時期になると担任以外の保育者にも柔軟な気持ちでかかわりをもてることが分かった。また、㊦の場面で、夏子と志保の間に制作の過程でトラブルが起きた。お互いの気持ちを出し合いながら、歩み寄ろうとする。「せっかく仲良くつくっていたのにけんかばかりになった…」とどうしようもない気持ちを夏子は志保に伝えた。志保も泣いているが、夏子から離れず、かかわりをもとうとした。二人は自分達で気持ちを寄せながら解決の方向を見つけていった。㊩

・子ども達はこれまで空き箱を使って様々な物をつくるという経験を重ねてきている。今回は「動く車をつくろう」ということで、様々な考えを出していった。ラップの芯を使ったり、フィルムケースを使ったりと回転する材料を使ってつくった。その仕組みやつくり方をこれまでの経験のなかから引き出しながらつくろうとする姿が見られた。㊪

・㊫の場面で理子は「動く」ということを考え傾斜を用いて遊んだ。うまく転がるために何度も試していた。時間をかけて、仕組みを考えたり、試したりしながら自分の納得のいく遊びを展開していた。

・この時期、子ども達は小学校に入学するということへ気持ちを高め、期待をもって園生活を送っている。本活動は卒園を目前にして取り組んだ。小学校教諭による保育ということで子ども達も興味をもって取り組んだ。

活動のなかでは「動く車」というつくった物を使って遊びを展開しながら様々な工夫をしたり、困ったことに対して自分達で解決の方向を見つれたり子ども達自身の力で取り組む姿に成長が見られた。

このようなことから 教育課程 V-4

経験してほしい内容 ㊬ 「1年生になるという喜びや期待をもち、いろいろなことに積極的に取り組む」ということに子ども達の姿は適していると考える。子ども達はこれまでの経験を生かして、遊びのなかで自ら学ぼうとする力を培っている。

## (2) 附属小学校授業観察

### ㊭ ① 観察の目的と方法

幼稚園での学びが小学校の生活のなかにどうつながっていくのか、実際に子どもの姿を通してとらえるために、6月、附属小学校1年生の授業における子どもの姿を観察した。

本園卒園生〔対象児：海男（年長児からの継続観察児）児童名は仮名である〕を中心に観察し、幼稚園の時の様子と比較しながら、学びのつながりや接続期の保育について話し合うことにした。

### ㊭ ② 単元・内容

【単元】1年生活科：「学校たんけんをしよう！」

～「ミニ附属小学校をつくろう」～

#### 【内容】

クラスで附属小学校の模型をつくるという大きな目的に向かって、学校探検をするという活動であった。前時からの続きで、「ない部屋さがし」、「部屋の数調べ」、「広さ調べ」、「場所の確かめ」という4つから自分のめあてを決め、各自校内を探検しながら活動を進め、最後に分かったことを発表し合うという内容の授業だった。

観察者：宮村まり（表記はMとする）

(児童名は全て仮名とする)

\*本園の卒園児海男の、授業での姿を観察した。

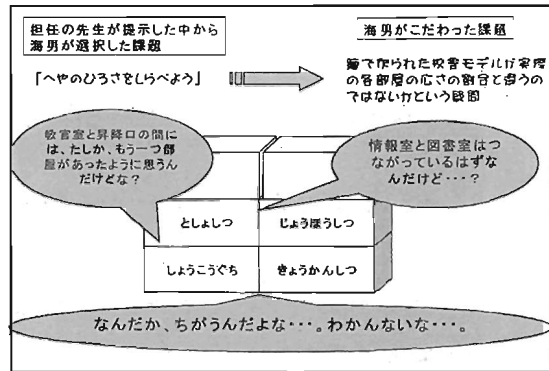
### ③ 海男の姿

海男は、担任の先生から提示された4つのめあてから「へやの広さ調べ」を選択し、一人で活動を始めた。

その課題を調べようとするなかで、海男には、それにかかわる新たな疑問が生まれ、「うーん、わかんない。」「なんか違うんだよな。」と言いながら活動が進まなくなる場面があった。(左の図、「2 自分の課題について調べる」の戸惑い・疑問の場面) これまでの学習過程において同じ大きさの籠を組み合わせた3階建ての校舎モデルがつくられていたが、この籠の組み合わせ方や部屋割りについて疑問をもち、それを解決するための方法を見いだせずにいた。



の発見したことを口に出しメモしていた。しかし、授業のまとめの段階で自分がこだわった疑問点や、調べて得た気づきを発言したり、担任の先生や他の友達に伝えたりするには至らなかった。



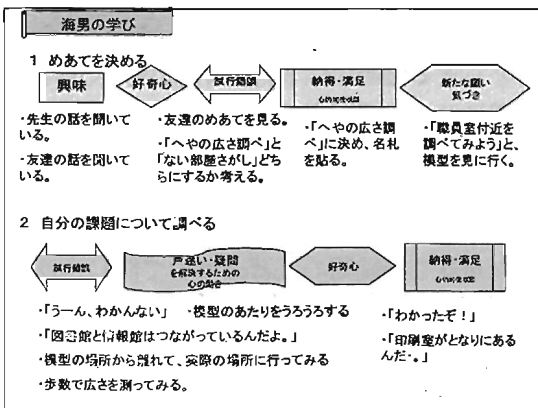
### ④ 考察

小学校の授業のなかで、自分の目的をもって学習に取り組もうとしている海男の姿がうかがえた。しかし、今回の観察では、海男が自己課題の解決に向けて動き出すためには、海男の戸惑いは大きく、Mの手助けも必要だったように思われた。

そこで、後日、園内研究会において、海男が自分で自己課題の解決に向かっていくためにどのような力が必要であったのかという視点から考察した。また、附属小学校の教頭先生に、園内研究会に参加していただき、話を聞く機会も得た。

海男は、「わからないな...。」という言葉は口に出していたが、何が分からないのか明確にしたり、自ら解決の方法を考え、活動を進めたりするには至らなかった。後日、教頭先生から、「『自分が困ったときの解決方法をどれだけ知っているか、考えることができるか。』ということは、とても大切なことである。」という助言をいただいた。自分の疑問をもち、その解決に向けて「友達に相談する。」「誰に聞けばいいのか判断して質問する。」「何を使って調べればいいのか考える。」などという【試行錯誤の経験】のなかで、主体的に解決していく成功体験を重ねて経験することが、自分で解決への道を切り開くために大切であるということであった。

6月に行った今回の1時間の観察のなかで、海男は、友達とかかわりをもって課題を共有し、ともに解決するような状況を自らつくることができなかった。小学校に入学して間もない時期の新しい友達や環境、また、幼稚園教諭の参観



周りには、別の課題を調べようとする2人の友達がいたが、どちらからもかかわりをもつことはなかった。一人で「わかんないなあ...。」とつぶやきながら次の活動に進まない海男に、参観していたMが声をかけた。それから、Mが海男と一緒に、実際にその場所に行って部屋の様子を見たり、歩幅で部屋の長さを測って確かめたりする方法を助言し、活動を進める援助を行った。すると、海男は活動を進め始め、「わかったぞ！印刷室があるんだ。」「やっぱり、情報室と図書室はつながってるんだよね。」など



などという特別な場面のなかでは、十分に自分を発揮できない状況も起こりうるという一場面であった。幼稚園でのくらしのなかで、少しずつ信頼関係を築いてきた友達とともに、自分の思いや考えを伝え合ったり、一緒に考えたりして様々な解決の経験を重ねてきたが、さらに【友達とコミュニケーションをとりながら活動を進める】という力の定着が必要であったと保育のあり様を省察する。

今回改訂された教育課程には、5歳児V期に「グループやクラスの友達と共通の目的に向かって計画を立てたり、考え合ったりして大勢で取り組む。」という経験してほしい内容がある。このような活動において、自ら友達とコミュニケーションをとって活動を進めるという経験を重ねることにも重きを置いていかねばならないと考える。

就学前の保育のなかで、子ども同士がつながるような保育者の援助や、「グループやクラスの友達」という、自分を安心して出せる心の通じ合った仲間や集団、または、同じ目的をもったグループのような少人数で、自己主張したり、友達の考えを受け入れたりしながら試行錯誤して主体的に活動を進める経験ということを大切にしていきたいと考える。

## 6 まとめ

「遊びのなかの学びを再考する」をテーマに掲げ、子どもの姿を追いながら研究を進めてきた。本園の教育は幼児期の発達の特徴に照らし、幼児の自発的な活動としての「遊び」を様々な角度から分析をすることを通して子ども達の「学び」のありようを明らかにすることができた。

- ・造形的な遊びの姿を観察し、カンファレンスを重ねることで学びの要素を引き出し、遊びのなかには学びがあることを検証することができた。
- ・検証を進めていく上で次の3点が遊びのなかで大切な基盤となっていたことが分かった。
  - 基本的な生活習慣の定着を図る（自立心→有能感を味わう）
  - 豊かな表現力を培う（聞く・話すことを中心に）
  - 人とのかかわりを豊かにする（協同性の育ち）
- ・17年度は上記の3点に加え「学びを育む」という視点を合わせて本園の教育課程を見直し、本年度の改訂に至ることができた。

- ・本年度は更に一人一人の遊びのなかにその子の自己目的（自己課題）があるとの考えに立ち、自己課題の所在を追求した。また、子ども達がよりよい学びの方向へ向かうために環境の構成、保育者の援助のあり方を研究することができた。
- ・幼児教育から小学校教育への学びのつながりを考えていくことは必要なことである。本研究でも保育実践を重ねていく上で接続期に育てたい子どもの学びの姿をとらえることができた。

私達は子ども達一人一人に着目し、個の学びから友達との学び、グループのなかでの学び、ひいてはクラスのなかでの学びへつなげていくことが大切であると考え。これからの研究の方向として「学びがつながる」「学びが広がる」という幼児が主体的に自らの学びを他者とのつながりのなかで深めたり、ふくらませたりするような保育の展開のあり方を追求できればと考えている。

## 謝 辞

本研究にあたり、下記の先生方に協力をして頂き感謝申し上げます。

横山 文樹先生（昭和女子短期大学）  
志波 典明教頭先生、池田 由美先生  
（熊本大学教育学部附属小学校）  
入家るり子先生（八代市立種山小学校）

## 参考文献

- 文部省 1999年「幼稚園教育要領解説」  
文部省 1999年「小学校学習指導要領解説 図画工作編」「小学校学習指導要領解説 生活編」「小学校学習指導要領解説 特別活動編」「小学校学習指導要領解説 道徳編」  
文部科学省 中央教育審議会（中間まとめ）2004年「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」  
文部科学省 2001年「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター  
2005年「幼児期から児童期への教育」  
沙見稔幸 2004年「遊びと学び」初等教育  
榎沢良彦 2004年「遊びにおける学び」幼稚園時報  
佐伯 胖 1975年「学び」の構造 東洋館出版社  
1995年「学お」ということの意味 岩波書店  
波多野隼余夫・稲垣佳世子 1973年「知的好奇心」中公新書  
秋田喜代美 2000年「知をそだてる保育遊びでそだつ子どものかしこさ」ひかりのくに  
丸山良平・横山文樹・富田昌平 2003年「保育内容として

遊びのなかの学びを再考する

の遊びと指導」建帛社

岸井勇雄・無藤 隆・柴崎正行 2003年「幼児教育の原理」同文書院

岩田純一 2004年「協同的な学びの成立」初等教育資料

(6月号)

横山文樹 2005年「子どもの心保育の心」

青柳 宏 2005年「人間関係の深まりと協同的な学び」  
初等教育資料(7月号)